

大会後記

第68回日本神経化学会大会後記

澤本 和延

9月11日から13日の3日間、8年ぶりの対面単独大会となりました第68回日本神経化学会大会を、名古屋駅前のウインクあいちにて開催いたしました。期間中は時折雨も降りましたが、幸い台風の影響を受けることもなく、全日程を予定通り実施することができました。国内外から931名の方々にご参加いただき、単独大会としては過去最多の参加者に恵まれました。今回の大会のために多くの方にご入会いただき、改めて本学会への関心と期待の高さを実感いたしました。

本大会のテーマは、名古屋らしい言葉である「まるっと神経化学！」。

単独大会ならではの「まるごと神経化学の大会」として、神経化学の魅力を再認識していただけるように、また、あらゆる分野・世代・立場を超えて研究者がつながることを目指しました。全ての参加者に楽しんでいただけるよう、プログラム構成から会場のデザイン、BGM、名古屋めしや大会グッズをはじめとする消え物企画まで、徹底的に議論して、工夫を凝らしました。

プレナリーレクチャー、レジェンドレクチャー、

特別講演、企画シンポジウム、公募シンポジウム、ミニシンポジウム、テクニカルワークショップ、イブニングセミナー、神経化学カフェ、若手育成セミナー、若手道場など、多彩な企画を通して、分子から行動、基礎研究から臨床応用に至るまで、幅広い議論が展開されました。ポスター会場では終始活発な議論が続き、若手研究者によるミニ口演では、研究初期段階の成果を自信をもって発表する姿が印象的でした。発表者の熱意と、積極的に議論に加わった参加者の皆さんの姿勢が、会場全体に一体感と勢いを生み出していました。

また、「名古屋めし応援隊」と題した地域の食品会社の協賛により、手羽先、ひつまぶしや名古屋スイーツなど、名古屋ならではの味覚とともに、リラックスした雰囲気の中で新たな出会いが広がりました。

大会運営にあたっては、近隣の教職員・学生が中心となってボランティアで運営を支えてくれました。現場での迅速な対応や丁寧な気配りに支えられ、円滑で活気ある大会を実現することができ



運営メンバー集合写真



鏡開き写真

ました。

大会実行委員長の金子奈穂子先生、プログラム委員長の和氣弘明先生をはじめ、各委員会のメンバーの方々、共催団体、協賛企業や財団、大会運営スタッフ、ボランティア、そして発表者・参加者の皆さん—ご尽力くださったすべてのの方々への感謝の気持ちは、言葉では言い尽くせません。

次回の第69回大会は、等誠司大会長（滋賀医科大学）のもと、2026年に神戸で開催されます

（NEURO2026）。

名古屋大会で生まれた数多くの出会いと議論が、次のステージでさらに発展し、日本の神経化学が世界へと発信されていくことを願っています。ご参加くださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。「まるっと神経化学！」の精神を胸に、次代へ繋ぐ大会として締めくくることができたことを、心から嬉しく思います。